第4回　全国被災地語り部国際シンポジウム　～多様な語りで未来へつなぐ～

被災の記憶 次世代へ継承

災害の記憶を共有して後世に伝える「第4回全国被災地語り部国際シンポジウム」が8～10日、熊本市中央区の市民会館シアーズホーム夢ホールなどで開かれた。同シンポは東日本大震災を機に2016年から始まり、今回から大会名に「国際」を加え、「多様な語りで未来へつなぐ」をテーマに掲げた。熊本地震の被災地に国内外から集った約160人が、今後の防災・減災や地域課題の解決につながる「語り」の意義と可能性を話し合った。

被災地からの報告

混乱、反省 防災に生かす

熊本地震の行政対応について語る井上・熊本市危機管理監

熊本市危機管理監　井上 学さん

2016年4月16日午前1時20分ごろ、私は14階建ての熊本市役所の12階にいた。

熊本地震の前震で避難した約6千人分のパン6万個を確保し、弁当3万食の発注も済ませ、残っていた職員と仮眠を取ろうと机に突っ伏した時だった。本震が発生した。揺り込んだ際、机ごと飛ばされ、周囲は暗闇になった。

真っ暗。ガラスが割れ、ロッカーが転倒した。感じたことのない「死の恐怖」に襲われた。

階段を駆け降り、外に出ると土ぼこりに覆われていた。かび臭く、熊本城の石垣が崩れたのだと分かった。余震でくらくらし、揺れを体感し続ける。

初期の情報が拡散し続け、水道復旧後も大量のペットボトルが送られてきた。

避難所も混乱した。市職員が押し掛けてくる避難住民に「ここは違う」と追い返すなど、ベテラン職員が入れ替わりのローテーションで送った結果、運営主体の教職員や施設管理者、被災者とのコミュニケーションや信頼関係ができないかなかった。

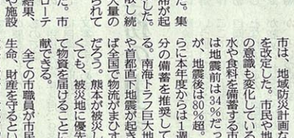
高齢者や障害者、べッド同伴者などが共同生活ができず、車中泊やテント泊に移行した。生活環境が悪化し、災害関連死が相次いだ。

多くの反省を踏まえて、地域防災計画などを改定した。市民や地域の意識も変化している。水や食料を備蓄する市民は地震前は34％だったが、地震後は90％超。さらに本年度からは1週間分の備蓄を推奨している。南海トラフ巨大地震や首都直下地震が起これば全国で物流が滞るため、被災地に優先して物資を届けることに貢献できる。

全ての市職員が市民の命を守る意識と重要な使命を改めて認識している。この体験を、全国の災害、減災をけん引していけるよう、職員一丸となって積極的に取り組んでいく。（58歳、当時は市民生活部長）

紙芝居 震災描く

「野島断層保存館」（兵庫県淡路市）


阪神・淡路大震災で犠牲になった子どもをモデルにした紙芝居

「多様な語り」の実践例として兵庫県淡路市の北淡震災記念公園野島断層保存館が、2010年から行っている紙芝居「まーくんの約束」。主人公は、1995年1月の阪神・淡路大震災で犠牲になった子どもをモデルに。

「震災の教訓を伝えたい」と、遺族の思いが詰まっている。

「震災を知らない子どもたちに、震災の怖さや命の大切さを